

施設実習のリスクと性格傾向の関連について

—性格傾向のパターンによる施設実習リスク予測に関する予備的研究—

宮崎 隆穂・吉川 明守

Association between the risk factor of training and the characteristic pattern.

Takao Miyazaki, Akimori Yoshikawa

問題と目的

施設実習の意義に関しては、たんなる同情心からではなく、真のヒューマニズムに根差した、十分な援助技術を身につける¹⁾という見解など多数挙げられている。宮崎らの先行研究²⁾では、施設実習の意義を検討するためのデータとして保育系短大生の社会福祉施設に対するイメージについてSD法を参考に形容詞対で測定を行った。得られた施設イメージに関する形容詞対の多変量データに対して因子分析を行い、「洗練されたあたたかさ」「とっつきやすさ」という二因子をもとに施設実習前、施設実習後、6ヶ月後のフォローアップ時の施設イメージ変化を追跡した。当時実習先施設の都合により、施設実習時期が2つの時期に分かれており、130名の学生の約半分が5月に施設実習を、残りの半分が8月あるいは9月に施設実習を行っていた。この実習時期の時間差を利用して、ウェイトニングリストコントロールデザインによる調査を遂行している。結果として、実習先行群、ウェイトニングリスト群ともに実習体験を機に施設イメージが、ネガティブな方向からポジティブな方向へ変化することが明らかになり、しかもその変化は一過性のものではなく、数ヶ月程度は安定して継続していることも確認された。

つまり保育系短大生にとって施設実習の積極的な意義のひとつは児童福祉施設に対する偏見やネガティブなイメージの低減にあることが示された。しかし一方で少数ながら（～20%弱）施設実習により、施設イメージがネガティブに変化する群がいることも指摘され、マッチングの問題や個人内特性による個人差の取り扱いが今後の課題とされた。このことは、一般的に施設実習を経験することによって社会福祉施設一般へのイメージがポジティブな方向へ変容するポジティブ変容群（多数派：マジョリティ）とネガティブ変容群（少数派：マイノリティ）が、事前に予測することができるかどうか、という実習計画上の問題を提起する。

いわゆるマッチングの問題に関しては、実習施設の種別、実習生の希望、拘束時間の長さなど多岐にわたる因子が考えられる。実習指導経験から考えても、一口に施設実習といっても配属先によって実習の様子はかなり違う。まず実習先が知的障害児の施設か児童養護施設なのか母子生活支援施設なのか、また入所型施設なのか通所型施設なのか、こうした受け入れ先の違いは実習配属を考える上で見逃せな

いものである。また本来保育系短大生の多くは保育所あるいは幼稚園を将来の進路と定めてやってくる。社会福祉施設でのボランティア経験もない、施設実習での動機づけが明確ではない場合、実習が困難なものになることは容易に想像がつく。ただしこうした受け入れ施設側の要因やボランティア経験等の従来からの学生指導においても比較的把握が簡単なものについては、きめ細かな施設配当などを工夫することである程度解消可能であると考えられるし、さらにいえば、施設イメージのネガティブ変容群のようなマイノリティの出現はいくら配属を工夫したところで偶然に発生してしまう、恒常誤差である可能性も考えられる。

しかしもう一方の通常の学生指導においては把握しがたい個人内特性による個人差の検討についてはまだ未解決の部分が多い。個人内特性による個人差は、一般的に「人格」「性格」として検討されてきており、今回は個人内特性として性格特性に注目し検討することとした。検討する性格特性として近年 Costa & Macraeによって提唱されている五因子性格モデル (Big Five Model) に基づくものを取り上げる。先行研究によれば、計量心理学的な検討が行われており、異なる文化間でも同一性が担保されるかという交差妥当性がチェックされていること、因子的妥当性をはじめとする構成概念妥当性がチェックされていることが明らかになっている。またこうした性格特性は、時間の経過にある程度頑健なことが知られている。

よって本研究においては、五因子性格モデルに準拠した性格特性の個人差の把握によって、施設実習経験によるポジティブ変容群とネガティブ変容群の出現を説明することができるか、検討することを目的とした。

方法

調査対象者は先行研究²⁾で使用されたデータセットに加え、新しく体制を変更した実習指導を受けた学生のデータを追加して使用した。手続きに関しても先行研究に²⁾ 準じる。調査対象者には書面によるインフォームドコンセントを取って、調査の目的の理解を得て、協力に際しても自由意思のもとで依頼が行われた。追加したデータに関しては、本学幼児教育学科2年生128人に質問紙調査を実施し、SD法を参考に施設イメージと実習前不安、実習後の満足度などを測定し、実習前、実習後、フォローアップの3つの時期にわたってデータを得た。今回は、質問紙調査として先行研究でも用いた施設イメージ調査質問紙に加えて、性格特性を測定するために、CostaとMacraeによるNEO-PIRの日本語標準化版³⁾ (下仲ら, 1998: 東京心理株式会社発行版) を用いた。日本語版については信頼性・妥当性の検討は行われているが、今回はその短縮版であるNEO-FFIを用いて、五大性格因子を測定した。測定される五因子はそれぞれ、神経質傾向 (Neuroticism)、外向性傾向 (Extraversion)、(経験への) 開放性 (Openness)、調和性 (Agreeableness)、誠実性 (Conscientiousness) である。一般に性格特性は個人内では長期的に安定していることが言われており、今回は遡及的にデータをさかのぼってポジティブ変容群とネガティブ変容群との関連を検討した。データは、データ分析ソフトSPSS14.0J for Windowsを用いて集計、分析した。

結果

1. 施設イメージネガティブ変容群と性格特性の関連について

先行研究²⁾ によれば、施設実習に行ったもののうち、80%から90%の学生は児童社会福祉施設に対し

てポジティブなイメージ変化を示すことが知られているが、今回も同様に15%ほどのネガティブ変容群をえることができた。それ以外の85%のサンプルをポジティブ変容群と設定した。まず、各性格因子得点の平均を基準に高群・低群にわけ、ポジティブ変容群・ネガティブ変容群とのクロス表を構成し、 χ^2 検定を行った。結果は開放性の性格因子について、有意傾向ではあるが統計的に有意な偏りが見られ（ $\chi^2=5.29, df(2), p=0.06$ ）、残差分析の結果、開放性の性格特性が低い場合にネガティブ変容群の割合が他のセルと比べて高いことが示唆された（table1. 参照）。

Table1. 施設イメージ変容の方向性と開放性の関連

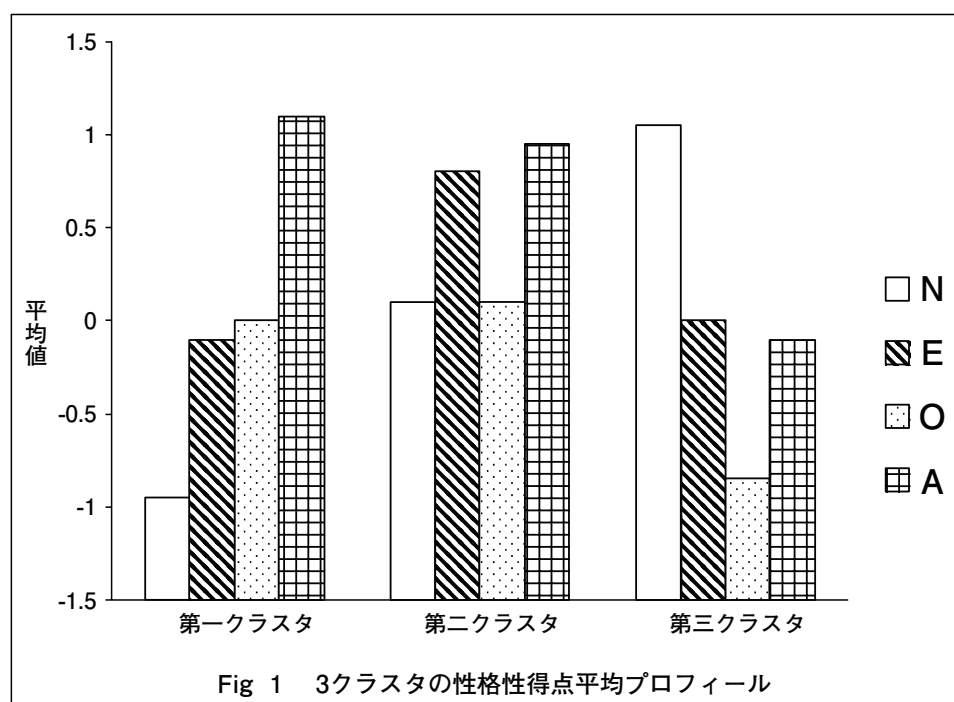
施設イメージ	開放性		計
	高群	低群	
ポジティブ変容群	58	52	110
ネガティブ変容群	5	13	18
計	63	65	128

2. 性格特性プロフィールによるクラスタリング

ビッグファイブモデルによる性格の把握は、類型論ではなく特性論に基づいている。本来であれば、理論上各性格特性の平均値を基準にすると、性格特性ごとに（例えば、神経質傾向 高低群（2）× 外向性傾向 高低群（2）・・・）2の5乗=32パターンの性格特性プロフィールが成立するが情報量が冗長すぎて現実的ではない。そこで情報の縮約表現のため、被験者の性格特性得点をデータにクラスタ分析を行った。前項の結果を受けて、「開放性」が高いクラスタが出現することという条件を設けてグループ内平均連結法によるクラスタ分析をおこない、3つのクラスタを得た。第一クラスタには65名、第二クラスタには33名、第三クラスタには30名の被験者が含まれていた。 χ^2 検定を行ったところ、有意な人数比率の偏りが見られた（ $\chi^2=35.3, df=2, p<.001$ ）。

次に、得られた3つのクラスタを独立変数、ビッグファイブモデルによる性格特性得点、すなわち「神経質傾向得点（N）」「外向性傾向得点（E）」「開放性傾向得点（O）」「調和性傾向得点（A）」を従属変数とした分散分析を行った。今回は誠実性傾向得点についてはクラスタリングにほとんど関連していなかったため従属変数として投入していない。その結果、すべての従属変数において統計的に有意な群間差がみられた（「神経質傾向得点（N）」：F（3,124）=121.5, 「外向性傾向得点（E）」：F（3,124）=90.56, 「開放性傾向得点（O）」：F（3,124）=92.33, 「調和性傾向得点（A）」：F（3,124）=115.23, すべて $p<.001$ ）。Figure 1に3群の各性格特性得点を示す。

TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較の結果、「神経質傾向得点（N）」については、第三クラスタ>第二クラスタ>第一クラスタ、「外向性傾向得点（E）」については、第二クラスタ>第一クラスタ=第三クラスタ、「開放性傾向得点（O）」については第一クラスタ=第二クラスタ>第三クラスタ、「調和性傾向得点（A）」については第一クラスタ=第二クラスタ>第三クラスタという結果が得られた。



3. 施設イメージネガティブ変容群と性格特性プロフィールによるクラスタとの関連について
 性格特性プロフィールによるクラスタと施設イメージネガティブ変容群との関連を検討するために、
 3つのクラスタと施設イメージポジティブ変容群、ネガティブ変容群とクロス表を作成し χ^2 検定を試

Table2. 施設イメージ変容の方向性と各クラスタの関連

施設イメージ	クラスタ			計
	第一クラスタ	第二クラスタ	第三クラスタ	
ポジティブ変容群	59	30	21	110
ネガティブ変容群	6	3	9	18
計	65	33	30	128

みた (Table 2 参照)。

ただし、一つのセルに5未満のものが含まれていたために、フィッシャーの直接確率検定を行った。結果は正確有意確率(両側)が0.048であり、統計的に有意な偏りが見られることが示唆された。特に第一クラスタと第二クラスタではネガティブ変容群の出現率が10%弱であるのに対して、第三クラスタでは50%弱になっていることが読み取れた。

考察

結果より、単純な施設実習リスクとして開放性傾向の低さがあげられることが明らかになった。統計的には有意傾向ではあるが、NEO-FFIによる開放性得点が平均より低い場合、ネガティブ変容群の出現

リスクがそうでない場合の2倍程度になっている。開放性傾向は、経験に対する開放性であり新しいものを受け入れることや好奇心の強さと関連があるとされている。つまり開放性傾向が低いグループは保守的で新しい事態や状況、自分自身の認識を変えることに消極的である可能性が考えられる。このような新しい経験（この場合は社会福祉施設での実習体験）によって自分自身の認識がなかなか変わりにくいことによって、施設イメージのネガティブ変容群が増えることが予想される。

また、ビッグファイブモデルによる性格特性プロフィールを利用してクラスタ分析を行い三つのクラスタを得た。第一クラスタは神経質傾向が低く、調和性が高いという特徴を持つグループで落ち着いており周囲と親和的にやっていけるという様子が推察される。保育系短大生の中でも最も集団が大きく保育を志す者が多いということと関連していると思われる。第二クラスタは外向性傾向と調和性が高いという特徴を持つグループであり、明るくコミュニケーション能力に優れるという様子が推察される。第三クラスタは、保育系短大生の間ではマイノリティではあるが開放性が低く神経質傾向が高いという特徴を持っており、保守的にかつ神経質という様子が推察される。クラスタ分析によるこの三つのクラスタでネガティブ変容群出現率を比較した結果、第一クラスタや第二クラスタでは実習体験による施設イメージのネガティブ変容群出現率が10%弱であるのに対して、第三クラスタでは50%弱になることが明らかになった。すなわち、開放性傾向単体でもある程度施設実習リスクは予測できるが、第三クラスタに見られるように開放性傾向の低さに加えて神経質傾向が高いという条件がそろった場合、施設イメージのネガティブ変容群出現率がかなり高まり、精度の高い予測が可能になることが示唆された。

つまり、実習前指導の段階で性格特性などの把握が可能だった場合、施設実習リスクが相対的に高いグループは、開放性が低く保守的で、かつ神経質傾向が高い、という特徴に注目することによってある程度事前にスクリーニングできる可能性がある。こうした施設実習の相対リスクが高いグループを優先的に実習生本人の希望によりマッチングしたり、事前指導の相談にのるなどきめの細かい指導をすることが、施設イメージのネガティブ変容群出現率を抑制できる可能性がある。

今後の課題として実際にこのような対応が施設イメージのネガティブ変容群出現率を抑制するかどうかデータをもって検証することなどがあげられる。また、どうしてもネガティブ変容群自体がマイノリティのためクロス表によるノンパラメトリック検定が適用できない事態があった。この点に関連してさらにサンプルを積み重ねデータ数を増やすことにより、検定力の高い解析によって統計的な有意差が導かれるかどうか検証することも今後おこなわれるべきである。

引用文献

- 1) 教育・保育実習を考える会 編、「福祉を实践するための66項」、蒼丘書林、1998、30ページ
- 2) 宮崎隆穂、吉川明守、宮越敏男「保育系短大生における施設実習後の施設イメージの変化」、新潟青陵大学短期大学部研究報告38、2008、59-68ページ
- 3) 下仲順子、中里克治、権藤恭之、高山緑 「日本版EO-PIRの作成とその因子的妥当性の検討」、性格心理学研究 6(2)、1998、138-147ページ